歴の高いエリート集団であるからではあるが。

結婚歴は独身が22.7%、既婚が57.7%、離婚が13.2%，同棲が5.0%である。男女別にみると、女性は独身が28.3%で既婚者は男性より少なく44.6%である。離婚者は女性の方が多く男性の9.4%にたいし18.5%もいる。やはりキャリアウーマンとして、それも管理職として男性と同じように仕事を継続するのは家庭との両立が困難なのであろう。同棲も男性3.1%にたいし女性は7.6%と多い。

同居者は既婚者が多いので配偶者と子供が最も多く30.0%を占める。次に多いのが配偶者と二人だけの子供がいない夫婦が29.5%である。女性は男性より独身者が多いので一人暮しが20.7%で、配偶者と二人だけが23.9%である。配偶者と子供は20.7%を占める。

出身地は都会およびその郊外がほとんどである。出生順位は第一子が最も多く36.4%を占め、次に第二子が26.8%である。一人っ子と第一子は男性の方が多いが第二子は女性の方が多い。それ以上は男女の差はない。

最後に政治的に保守か革新かを質問したら革新だという回答が41.4%で保守という回答が35.0%であり、その中間が21.8%である。男女別にみると女性は49.0%が革新と回答しているが、男性は41.6%が保守と回答しているのである。女性の方が男性より革新が多いのはさすがアメリカである。また、エリートは革新的かと思われている傾向があるが、案外保守的な者が多いようである。

2) 仕　事

では次にエリート達はどんな仕事をしているのかその特徴をみてみよう。まず最初に、どんな規模の組織に勤務しているのだろうか。現在勤務している組織の成員の平均は7,030.10人でありかなりの大組織である。また同じ職場には平均282.19人いる。やはり高学歴のエリート達なので一流の大企業に勤務する者が多いようである。では有給休暇は年間何日あるのかを質問したら平均19.71日である。土、日も含めると1ケ月間位の休暇が取れるが実際にはどれくらいの休みを取っているのかを質問したら、平均15.33日である。アメリカでも有給休暇は100%消化されていないのである。日本では半分位しか消化されていないが、アメリカではそんなに低くないが77.78%しか消化されていないのは驚きである。では病欠は年間何日位しているのであろうか。平均2.95日で案外少ないのである。

次に現在の会社に何年間勤務しているのかを質問した結果最も多い回答は1−3年という短期間が45%を占めている。これは女性の方が多いと思われるだろうが男女差はない。次に多いのは10−40年という最長期間が25.9%である。これは男性の方が女性より多い。平均は10年10ケ月である。サンプルの平均年齢は40.67歳であるが、アメリカでは転職率が高いので同じ会社に長く勤務する者は日本と比較したら少ない。

では次に現在の職場に今後何年間位勤務するつもりかを質問したら、1−3年という短期間の回答が最も多く33.2%である。15年前の調査では[4] 7年以上という回答が最も多かったのだがリストラなどで大量解雇が続き社員達も同じ会社に長く勤務できないと感じているのであろう。2番目に多いのは7年以上で31.8%である。1年未満という回答も15.5%あるのは驚きである。これは女性の13.0%より男性の方が17.3%と多いのはさらに驚きである。男性でも一つの会社に長く勤務しようと思っている者は少ないのである。

業績評価は1年間に平均1.01回であり、ほとんどの職場で1年に1回行われるようである。昇給は年平均0.92回であり大体年1回は昇給しているようであるが、平均が1.0以下ということは年1度昇給しない職場もあるのである。業績評価と昇給の回数に関しては男女差はない。

転職は何回くらい経験しているのか質問したら平均3.22回もしているのである。1度も転職したことがない者は15.5%だけである。最も多いのは30回以上という者もいる。10回以上も転職している者も1.4%いる。6−10回が12.3%である。転職5回までは男性の方が女性より多いが、6回以上は女性の方が多い。

では同じような仕事で同じような条件だが給料が20%高い仕事を提供されたら転職するかどうか質問したら、転職すると回答した者が70%もいる

4) 川久保美智子『日米社員の意識比較』講談社、1991年。